

なぜ自我は不正と言われるのか？

——パスカル『パンセ』による「倫理学」への導入——

根 田 隆 平

ここでは、本年(2007年)度「倫理学」(青山キャンパス・通年・金曜6時限)¹⁾の講義を行う際に、前期において私がとくに意識して実践を試みた点について、そのことに絞って報告する。まず「倫理学」という学問への導入の仕方について述べる(I・II)。次にそのことと関連する限りで、パスカルの思想を素材とした講義の具体的な内容の一部を紹介する(III・IV)。最後に、前期の授業をふり返り、この試みについて簡単に省みる(V)。

I 「善い」と「悪い」はリアルに響くか？

善い、悪い、という言葉は、今日どのくらいの切実さをもって私たちの心に響くだろうか。「倫理学」の講義をするにあたって、私は、この二つの言葉がもはや切実さを失ってしまっている、との見立てから出発する²⁾。私たちがリアルに、切実に感じるのは、嬉しさであり、悲しみであり、怒りであり、愉しさであり、淋しさであり、愛しさであり、疎ましさをあり、憎しみであり、後悔の念であり、期待する気持ちであり、気に入ったり気に入らなかったりの感覚、である。「どうでもいい。」という感じ³⁾も人によってはリアルであろう。単純化して、「好き(快さ)・嫌い(不快さ)」がリアルである、とひとまず括ってしまってもいいかもしれない。そのような具体的な感覚、感情、情念、情動をさまざまな仕方でもリアルに生きている私たちにとって、「善い・悪い」という言葉は、具体的な生の示す多様な姿に貼り付けられる単なるレッテル、抽象的で掴みどころのないレッテル、本当には関心が向かない単なる言葉となっているのではないだろうか。思うに、「美しい」や「醜い」の方が、ずっとリアルな言葉

なぜ自我は不正と言われるのか？

であろう。いつの時代にも「美」に対する人々の関心は、高い。美は快さをもたらす。実際、《善いことは美しいことであり、悪いことは醜いことである。》という古代ギリシャ人たちの考え方について、話のついでにごく簡単に言及しただけであっても、「知らなかった、面白い。」といった類の反応が、複数の学生から返ってくる。《立派なこと・卑劣なこと》なら、まだピンと来るのである。これまでの講義経験から、私が「倫理学」への導入に際して第一に心に留めているのは、このことである。

ところでしかし、どうしてこのようなことが起きているのだろうか。この事態の意味を掘り下げて考える必要があり、考えつづけているが、その考察内容(その一部が後期の講義の主題となる)はここでは措くとして、とりあえず、学生とのやりとりを含む講義経験や日々の観察によって、次のことが現象として認められると思う。すなわち、「こういうことをしたら『悪い』と社会や世間ではされている。」ことは知^ちっ^てい^て、しかしその上で、「バレな^らきゃいい。」という個人の「格律」でもって行動する行動様式が、学生に限らず多くの人々の「当たり前」になっていること、これである。私は、この現象が、人々が根本的な仕方で迷^{まよ}っているということを示すものであると、見なしている。自分が何のために生まれてきて、いま生きていて、いずれ死ぬのか。その答えが、明示的にも暗黙的にも、見失われてしまっている。「成功」は人生の目標にはなりうるが、その「成功」が、人生の意味の充填をもたらすかどうか、本当のところ、分かっていない。こういったことを、多くの場合、人々は少なくとも暗黙的に知^ちっ^てい^る。そして、いま述べた二つの「知っている」のあいだの質の差は、大きい。こうして、「善・悪」のリアリティがますます失われていく。残るは、「好き(快さ)・嫌い(不快さ)」のリアリティだけ、ということにもなる。

II 身に引き受ける、正しく疑う、具体的に考える

ここまで行ってしまった場合に、ごく軽微な理由(例えば邪魔だという理由)で人を殺してしまおうと考えるようになることは、じつは当然の成り行きであろうと思う。実行しないまでも、想像上でそのようなことを考えるだろうし、

もしバレないという完全な保障が得られれば、実行するかもしれない⁴⁾。

私は、講義の最初の方で、そのことを否定しない。《そのようになっている。》ということを確認するだけ、である。また、「それをそれとしていったん認める態度には少なくとも嘘がない。」とも、はっきりと言う。これが「倫理学」への導入に際して私が意識して実践している第二の点である。さて、この段階で、「そういうのはやっぱり絶対おかしいし、嫌だ。」と感じ、それを表明する学生が——当然のことながら——出てくる。もちろん私としても、「バレなきゃいい」レベルから「悪いことは悪い。」レベルまで、様々な学生がいることは承知している(後者は少数派であるが)。しかし後者の考えを表明する学生が、どういう意味でそう言っているのか、きちんと見極める必要があることを忘れてはならない。その場合には、意識してそれを見極めるようにしている。これが第三の点である。

《道徳主義》の畧とでも言うべきものがある。これまでの文脈から「善い・悪い」という言葉を例にとりて簡単に述べれば、「善・悪」について思い込みで語ったり断罪したりすること、これらの言葉の水準で「倫理」の「問題」を云々することは、まず、「問題」を構成しているリアリティに肉迫するという努力を本当に行った上でなされているのだろうか。却ってそのことの困難さと努力の必要性を忘れさせているのではないか。つぎにそれは、他ならぬ自分自身のありのままの姿を見据えることの邪魔になってはいないか。「善・悪」「是・非」の水準でいきなり「問題」を論じることは、自己の心理の奥にある冥い層から目を逸らすための格好の手段となっていないだろうか。自分を突き動かしている本当の理由を精査する習慣を身につけることに対する障害となっていないか。いやむしろ、これらすべての意味で、有害ですらあるのではないか。

問いを自分の「身に引き受ける」こと、「正しく疑う」こと⁵⁾、「具体的に考える」ことの困難と大切さについて、「倫理学」への導入に際し、意識して繰り返し強調するようにしているのは、こういった理由による。

しかしこれではまだまだ不十分である。私自身の体験も交えながらいくつか具体的な話⁶⁾をした後で(ここまでで授業の二回半)、いわば間髪入れずに、パ

なぜ自我は不正と言われるのか？

スカル『パンセ』の断章の解釈へと移行し、その解釈を通じて、ここまで話したことをより詳しく説明し直す必要がある。

III 切実さ——リアルな「価値」とは？

まず取り付いて読んだのは、いわゆる「気晴らし」に関する断章二つ（B164, B143）と、「私とは何か。」の断章（B323）の、三つの断章である。これらの断章をめぐる三回半の授業時間を使った。最初にいわゆる「気晴らし」の断章を取り上げたのは、この簡潔な断章が、ここまで述べてきたような現代の私たちの「在りよう」を示して余りあるものだ、と考えるからである。講義で扱った二つの内、短い方のものを引用する。

① この世のむなしさ (la vanité) を悟らない人は、その人自身がまさにむなしなのだ。それで、騒ぎと、気を紛らすこと (le divertissement) と、将来を考えることのなかにうずくまっている青年たちをみな除いて、それを悟らない人があろうか。② だが、彼らの気を紛らしているものを取り除いてみたまえ。彼らは退屈のあまり消耗してしまうだろう。そこで彼らは、自分の虚無を、それとは知らずに感じるだろう (Ils sentent alors leur néant sans le connaître)。③ なぜなら、自分というものを眺めるほかなく、そこから気を紛らすことができなくなるやいなや、耐えがたい悲しみ (une tristesse insupportable) に陥るといことこそ、まさに不幸であるということだからである。(B164)⁷⁾ (傍点および①②等の番号の付加は引用者。以下同様。)

この断章をめぐる、講義で強調し、注意を促した諸点の内、要点だけを摘記する⁸⁾。

①の部分に関して。[A]「むなしさ」の原語 la vanité は「虚栄心」の意味も持つ。虚栄と虚しさは表裏一体である。はたして世の中を見渡し、自分自身を省みて、どうであるか。[B] もう一つの断章（B143）の方で「気晴らし」と訳されている「気を紛らすこと」le divertissement とは、文字通りの「気晴ら

し」だけではなく、「成功」をめざしての行為（「将来を考えること」）も——むしろ主にそれが——意味されている。自分の身に引き受ける努力をせずに道德の問題にいて議論をするという行為もまた、これに含まれる。[C] そのようにして自分の外に次々に目標を設定することで（③の部分に書かれてあるように）自分を眺めるのを避けよう避けようとしているのが私たちなのだ、と。どうだろうか。[D] le divertissement を動詞に戻して se divertir とすると、これは、「自己自身への目を自ら逸らす」という意味にとれる言葉である。この「逸らし」に失敗すると「耐え難い悲しみ」に陥り、「不幸」になる、とパスカルは述べているわけである。どうだろうか。[E] なぜ自らを見つめると不幸になるのか。自らの「うつろさ」「虚栄」「虚無」にはっきり気づかされ、自分自身についてじつは何も知らない、空っぽさ加減にはっきりと気づかされるからである、と。どうだろうか。[F] さらに、もう一方の断章の最後の一文、「人間の心というものは、なんとうつろで、汚物に満ちていることだろう。」から、私たちの「心」(le cœur) は「うつろ(穴)」(creux) であるばかりでなく、汚物 (ordure) に塗れ切っている⁹⁾、とパスカルは見なしている。自身を省みて、どうだろうか。[G] 最後に②の部分に戻って、自分の虚無を「それとは知らずに感じる」とは、どういう意味か。「知る」(connaître) とは「明示的に知る」こと、「感じる」(sentir) とは「暗黙的に知る」こと、と理解できる¹⁰⁾。私たちは自分の虚無についてうすうす気づいてはいないだろうか。しかもそのことから目を逸らしているのではないだろうか。どうだろうか。講義の冒頭で述べた二つの「知っている」の一方を、これは言い当てていないだろうか。

おおよそこのような点に注意を促す。ここでパスカルは「倫理」的な判断については述べていない。私たちの「在りよう」のいわば身も蓋もない記述である¹¹⁾。用いられている言葉は具体的であり、リアルに響くものばかりである。ただ、簡潔すぎるので、いろいろと考えながら意味を補って読む必要がある。しかし却ってそのことが、各自が自分で考え始めるきっかけを与えてくれる¹²⁾。例えば、「不幸」ということを、「耐え難い悲しみ」に陥るというリアリティで捉えるとしても、なぜそうなるのかについて詳しくは書かれていない。そここ

なぜ自我は不正と言われるのか？

それを各自が自分で考えるという姿勢を持つこと、これを私は聴講者に強く要求する。「不幸」について言えば、「考えられる内で、最大の不幸とは、どのようなことか。」と尋ねて意見を聞いた後で、「不幸にも様々なニュアンスがあるが、最大の不幸とは、他ならぬ自分自身に対する好感をまったく失ってしまっている状態のことなのではないか。」という、私自身が高校生の時にトーマス・マンの初期の短編集を読みながら思い当たった説を言って、それについてまた意見を聞いたりした。

次いで取り上げたのが、「私とは何か。」の断章(B323)である。ここでもパスカルはきわめて具体的な話をする。まず、「一人の男が通行人を見るために窓に向かう。もし私がそこを通りかかったならば、彼が私を見るためにそこに向かったといえるだろうか。いな。なぜなら、彼は特に私について考えているのではないからである。」私たちはいわばこの匿名性の水準、社会的役割の水準で人と関わっている。考えてみれば、思いの外、殆どがその水準で済んでしまっている。次にパスカルが出すのが、今度はいきなり「恋愛」という切実な場面である。「だれかをその美しさゆえに愛して(aimer) いる者は、その人を愛しているのだろうか。いな。なぜなら、その人を殺さずにその美しさを殺すであろう天然痘は、彼がもはやその人を愛さないようにするだろうから。」男は女の美しさを愛し、(続く箇所では語られるのだが)女は男の能力を愛する、と。ここでは学生から様々な疑問が出される。ステレオタイプな見方ではないか。確かに。しかしよくよく自分を省みてみれば、基本はそうなのではないか。また、自分が嫌に思う性質を備えた相手をわざわざ選んで「愛する」対象にした人はいない。「自分は性格重視です。」という意見にしても、ここで言われる外面の美が、内面の美や性質に置き換わっただけで、むしろ却って高望みをしているのではないか。ここで詳しく書くことはできないが、要するに簡潔に述べられているこの文章を補うことで、あらゆる疑問は退けられるのである。「恋愛」という切実な場面であっても、あるいは、あるからこそ、切実に問題にするのは、相手の持っている性質のリアルな「価値」であり、その人そのものなのではない。これはいけないこと、「悪い」ことなのだろうか。この断章の最後の方

でパスカルは注目すべきことを述べる。「人は、ある人の魂の実体を、そのなかにどんな性質があろうともかまわずに、抽象的に愛するだろうか。そんなことはできないし、また正しくもない (injuste)。」例えばヘテロセクシャルな男が「同じ人間だから。」という理由で、自分にとって嫌な性質を備えた男を「愛する」ことはできない。できないことをできないとはっきり認める態度には嘘がない。そして、リアルな「価値」を捨象した抽象的な存在——例えば「人間」である限りにおいての「人間」——を「愛」(amour)の対象にすることの方が不正であり、間違っている、と。「不正」(injuste)、これは、ここまで見てきた文章の中で、「倫理」的な判断を示す、はじめての言葉である。

ここでも立ち止まって、自己愛 (l'amour propre) をめぐる断章 (B100) を併せて参照しながら、おもに「不正」という言葉の意味について意見を聞いたり応えたりしたが、さしあたり次の三点を確認した。(一) 自分から目を逸らしている私たちは、また、自分の欲望や関心との絡みで他人を見たいように見ている(そして自分は他人から見られたいようなイメージを他人に差し出している)のであって、お互いに《その人そのもの》を見ることを(少なくとも切実には)問題にしていないし、できない。(二) こういう具体的な在り方を自分の身に引き受けて考える時に、皮相な「ヒューマニズム」の言説は転覆させられ、吹っ飛んでしまう。(三) この断章で、「不正」という語は、行為(「愛する」)に対する「倫理」的判断として、用いられている。この三点を確認して、「自我の不正」の断章 (B455) の解釈へと進んだ。

IV 自我の不正——「在りよう」の見定めと「倫理」的断定

この断章をめぐっては、(迂回も含めれば)前期の残りの殆どすべてを用いて、解釈し、考えてみた。断章冒頭から三分の二ほどの部分までを引用する。

- ① 自我は憎むべきものだ。ミトン君、君はそれを隠しているが、そうしたからといって、それを除いたことにはならない。だから、君はやはり憎むべきものだ。② そんなことはない。なぜなら、われわれがしているように、

なぜ自我は不正と言われるのか？

すべての人に親切に (obligamment pour tout le monde) ふるまえば、人から憎まれるはずはないではないか。③それはそうだ、もし、自我を憎むということが、自我から生じる不快 (déplaisir) だけを憎むというのであるならば。④だが、私がそれを憎むのは、それが不正 (injuste) であり、それがすべてのものの中心になるからだとすれば、私はやはりそれを憎むであろう。⑤要するに、自我は二つの性質を持っている。それはすべてのものの中心になるから、それ自身、不正である。それは他人に従属させようとするから、他人には不快である。⑥なぜなら、各人の自我は互いに敵であり (chaque moi est l'ennemi)、他のすべての自我の暴君になろうとするからである。⑦君は不快を除くが、不正を除きはしない (Vous en ôtez l'incommodité, mais non pas l'injustice)。 (B455)

講義ではまずこの断章の構造について説明した。この断章では、自我の持つ二つの性質 (⑤) とされるところの、「好き・嫌い」の水準にある「不快」と、「倫理」的判断の水準にある「不正」の二つが、一見すると入り交じっているように見えるので、まずそれを腑分けして明確にする必要がある。不明瞭な感じがするのは、思うに、「憎む」というリアルな情念が、両者ともに対して語られているからであろう (①②③)。ともあれ、パスカルの考えを腑分けして図式化すると、こうなる。——[イ]「不快」とは、「他人に従属させようとする」(⑤) こと、「他のすべての自我の暴君になろうとする」(⑥) ことから、生じてくるものである。他方、[ロ]「不正」とは、「すべてのものの中心になる」(④⑤) こと、「各人の自我は互いに敵である」(⑧) ことが、その理由とされている。

この構図を確認した上で、[イ]の水準に関して講義で注意を促した諸点の内、要点だけを記しておこう。——[A]「ミトン君」の、いわゆる《自己中》にならなければいい、という言い分 (②) であるが、それに、身に引き受けた切実さは感じられない。とはいえ、これはある意味、私たちの日常的な感覚をよく示しているものではある。[B]ところで彼は、各人が《利己的な主体》である

ことは仕方がないという意識を持ち、その上で、上手くやっていく処世を語っているのだろうか。もしそうだとしたら、少なくともある意味、嘘がない¹³⁾。しかしそこがまず怪しい。[C] 彼の言う「すべての人に親切にふるまう」(②)であるが、まず、「すべての人」とは、文字通りのすべての人なのか。そうではないだろう。また、「親切にふるまう」とは、(III 節終わりで確認したような)互いに互いをきちんと見ることをしていない、できないという、自分たちの在りようを前提とした上で語られている言葉なのか。「親切に」とは、例えば相手の気に入るような接し方をする事だとして、それが相手にとって本当に「親切」なふるまいなのかどうかについて、疑問を持ちながら語られている言葉なのか。違っだろう。[D] しかしパスカルは③で、「それはそうだろう。」と、ミトンの言い分を一旦認めている。そのような水準([イ]の水準)で交わりあっているのもまた私たちの在りようだ、とパスカルは認め、それをそれとして認めない態度、行為を(先の断章で見たように)「不正」としているのだから。

重要なのは、ここからである。このような水準を認めながらも、しかしパスカルは、[ロ]の水準から、いきなり「自我は、それ自身、不正(injuste)である。」(⑤)と言って、《存在に対する「倫理」的断定》を下すのである。しかもそれ(自我という存在)を「憎む」と言って。先に、行為に対する「倫理」的断定があったとはいえ、あるいは、あったがゆえに、「在りよう」の見定めからの、これは驚くべき一発逆転であろう。あたかも、「君は存在が間違っている。」と言い放つが如く、なのであるから。しかし《断定》もここまで来ると、聴講者も「どういうことだろう？」という感じになり、無関心な態度、拒絶、反発が、影をひそめるようである。これは「お説教」には——あるいは「お説教」にすら——もはやならない。

問題は存在に関わる。[ロ]の水準では、存在の仕方それ自体が問題とされ、それが「不正」であると断定される。どうしてだろうか。パスカルはそっけなく、自我が「すべてのものの中心になる」、「各人の自我は互いに敵である」の二つを、その理由として挙げるのみである。講義はここで長く立ち止まり、さまざまな解釈、ときには平板な解釈を敢えて出しながら、聴講者が各自で考え

なぜ自我は不正と言われるのか？

るように、意識して促した¹⁴⁾。これぞ、という答えは前期ではまだ提示していない。そういう「答え」なるものがあるのかどうかすらたしかではない、という構えで臨まないと、おそろしく安直で「教科書」的な「答え」を言うことになってしまいかねない。私が思うに、パスカルから学ぶべきことは、そこにはない。——前期で私が明確な仕方で提示したのは、パスカルが自我の在り方を捉える、そのリアリティ(具体性)についての解釈、である。すなわち、パスカルの捉える「自我」とは、自分が死んだら世界が無くなる(かもしれない)と考えるような、自分が世界の開けの原点となっていることを強く意識する自我(「すべてのものの中心になる」)であり、その意味で《独我論的》な自我である¹⁵⁾と同時に、しかし他方で、他人もまた同じ在り方をしているということに(ある時ははっきりと、ある時はうすうすと)気づいてしまっている自我であり、そのことのリアリティを生きる不安な自我である。私はすべての他人を飲み込むが、そのすべての他人がそれぞれ私を飲み込み返してきている、という目眩のするようなリアリティを生きる不安な自我、狂気をも呼び込みかねないような不安な自我である。ここから、「各人の自我は互いに敵である」ということも出てくるであろう。——提示したのはここまでである。それがなぜ「不正」という「倫理」的断定へとつながるのかについての私の明確な解釈は、まだ提示していない。

V 巻き込まれながら巻き込むこと

これに「答え」するには、まだまだ考察の素材が不足している。前期では、パスカルの思想に私自身が巻き込まれる姿を晒しつつ——以上述べてきたような仕方で——この問いへと学生を巻き込むことに成功すれば、導入としては、それでいいと思っている。しかし、どの程度この試みは成功しているだろうか。はなはだ心許なくも思う。

「倫理」について語るとき、いかにリベラルな語り口で語ったところで、それはやはり押しつけである。パスカルに巻き込まれつつ、彼が書き遺した断章の解釈を通じて私自身の経験を語り、聴講者がもっているであろう経験へと訴え

たところで、それもやはり押しつけである。しかしそれならばいっそのこと、この押しつけを押しつけとして自覚した上で講義を進めていく方が嘘がないとは、言えないだろうか。その自覚を強くもって、巻き込まれつつ巻き込んでいくやり方があっていいのではないか。そもそも、ふだん目を逸らしていることをどうやって見据えさせ、耳に厳しいことをどうやって聴かせるか、ということとは、パスカル自身にとっての大問題であった。

この点、前期の授業を省みて、一つ、実践上有効かもしれないと感じているのは、パスカルを読んでいた喜劇作家モリエールよろしく、ユーモアや滑稽味によって笑わせながら、ふだん考えたくないであろう事柄を考えさせはじめる、という手法である。これには聴講者の心をほぐす効果があると言ってしまえばそれまでだが、笑いを誘うことによって聴講者のこころの感受性の或る部分が麻痺したその次の瞬間に、そのしびれが抜けきらんとする瞬間に、さっと、ずばり、ふだんは耳に厳しいはずの真実を、聴講者のこころへと通じさせるような効果を狙うのである。狙う、といっても、必ずしも意識してそれができるわけではないのだが、上手くいったときにその効果はたしかにあるように思う。

いま、「こころ」と書き、「通じさせる」と書いたが、後期では、「身に引き受け、正しく疑い、具体的に考える」ことを、「こころ」(le cœur)によって「考える」(penser)ことの問題として主題化しながら、ペンディングになっている問いの意味を——信仰の問題も含めて——引きつづき探っていきたい¹⁶⁾。すでに前期の終わりに、「考える葦」の断章(B347)、「こころの理性」の断章(B277)を簡単に読んで、考察の方向性は示唆しておいた。しかしまずは、前期全体の復習から始める必要があるであろう。

註

- 1) 履修者数は116名。出欠は毎回とっている。出席率は平均して7割前後である。
- 2) ここで述べているのは、現代の日本で生活する私たちの日常的な感覚において「善い・悪い」という言葉がもっているリアリティについてである。この見立てのゆえに、(メタ倫理学の議論はもとより)規範倫理学の議論の紹介から入ることは避けてみている。

なぜ自我は不正と言われるのか？

- 3) これはニヒリズムともはや言えないような、何かである。
- 4) これは授業中、授業後、学生に質問して確かめていることである。もちろん答えは各々いろいろなニュアンスを帯びている、「罪の意識が残るのが嫌だ。」という意見も目立つ。しかしそこでさらに、「罪の意識を忘れる薬があったらどうだ？」と尋ねると、分からなくなる。あるいはまた、「『罪の意識』と言うからには、『善・悪』という事にリアリティを感じているのか？」とも問う。答えは様々である。「殺したときの感覚が記憶として残るのが嫌だ。」と答える学生が多い。
- 5) このことの意味はいくつかある。この段階ではそのほんの表面的なことしか伝えていない。懐疑論と哲学的精神の違いについては説明したが、疑うべき時に「正しく疑う」ことの含意の説明は、後期へと持ち越された。
- 6) 死刑制度の「是・非」に関して言えば、被害者の遺族や加害者の親族がどういう気持ちになるのかをどの程度リアルに掴んでいるのか。あるいは、「飢餓状態で毎日何万人と死んでいく人がいる状況で、パソコン操作一つで簡単に献金できる先進国の人々は、献金しないという行為によって、見殺しという最悪の殺人を毎日犯している。」と断罪された場合に、実際に献金を続けるのか。続けないとすれば、なぜ続けないのか。——こういった問いを提示する。
- 7) 授業ではブランシュヴィック版(略号 B)を元とした訳である、前田陽一・由木康訳『パスカル・パンセ』(中公クラシックス)を教科書に指定し、その訳文を素材としている。ここでの引用にもそれを用いる。数字は断章番号を示す。
- 8) この断章に限らず、読みながら話したことはもっと自由で多様であり、また(授業中・授業後の)学生とのやり取りには豊かで興味深いものがあったが、おもに講義の進め方という観点から要点を記す。以下同様。
- 9) この一文で「うつろ」と訳されている「穴」(creux)には、じつは「虚しさ＝虚榮」(la vanité)とは異なったニュアンスを見るべきだと考えているが、それについては言わなかった。後期で「心」(le cœur)による認識を扱う際に、立ち戻って注意するつもりである。
- 10) 「知る」「感じる」などに関してのパスカルの言葉遣いについては、この段階では私の見解をごく簡単に述べるに止めている。この点に関しては、拙稿「習慣の利用はどのような意味において可能か」、『他者と自由についての古代ユダヤ教と古代ギリシア思想の比較研究』、平成 16-17 年度・科学研究費報告書、2006, pp. 93-102. で、(不十分ながら)考察してある。
- 11) 国王を例にとった断章(B142)等と読み合わせて、自分が何者であるかを知らずに死んでいく状態をパスカルが「悲惨」と呼んでいると捉えるならば、自分が何者であるか知ろうとして自分を見つめると「不幸」に陥り、しかもそれを避けるために「逸らし」をつづければ「悲惨」なままである、といういわばダブル・バインド状況へとパスカルは私たちを落とし込んでいくことになる、とも指摘した。
- 12) この講義は、パスカルの思想を学ぶというよりも、パスカルの思想に学び、それをきっかけに考えていく構えを基本にしている。このことをパスカルへと移行する際に、まず宣言する。
- 13) 紙幅の都合でここでその内容を記すことはできないが、この点に関して、パスカルの考えをより明瞭・判明にするために、リベラリズムを前提にした功利主義の立場と対照させながら、「具体的に考える」ことについて(講義の二回分を割いて)踏み込んで考察した。問題にしたのは、「個人」と「社会」と「場」の捉え方、自分にとって

の「近さ・遠さ」と応答可能性、「快・不快」と「愛・憎」の違い、イメージの問題から見た「パーソン論」の抽象性、倫理学説上の「主知主義」と「経験主義」の対立の意味とその解消について、などである。

- 14) 自我と自我が敵対する瞬間(リアルには、顔が変わる瞬間)については、私自身の実体験や観劇での体験の話などをし、各自、自分の体験に照らして考えるよう促した。
- 15) これについては、イギリス経験論者の「個人」の描像、日常的な「個人」の描像の方がむしろ独我論的なのではないか、という主旨の指摘を、磯崎祐介君から受けた。講義での説明に曖昧さがあったのは、私自身の理解にまだ曖昧な点があったからだと思う。講義内容をきちんと理解した上で自分なりに考えようとする態度から出てくるこのような指摘は、大変に有り難いことであり、嬉しいことである。
- 16) 拙稿「こころとからだで考えるということ」、『倫理学紀要・第14輯』、東京大学人文社会研究科・倫理学研究室、2005, pp. 20-39. で述べたことを元に、さらに突っ込んで考察していく。